京都文教中学高等学校・宗教礼拝
礼拝（らいはい）
令和6年1月22日
7号

大島忌
～感謝の誠を捧げましょう～

本日は、今日の京都文教学園の基礎を築かれた第三代校長、大島徹水先生の大恩に感謝する法要を勤め、全教職員・生徒の皆さんでこれからの学園発展のために尽くすことを誓い合う日であります。

大島先生は明治四年（一八七一年）三月十五日、愛知県知多郡でお生まれになり、九歳の時に出家されました。大変戒律の厳しいお寺で修行を積まれた大島先生は、この生活を通して質素倹約を旨とする生き方を学ばれ、そして実践し続けられました。

一九〇四年、獅谷佛定（しったにぶつじょう）上人を中心に坂根弥兵衛（さかねやへい）らを設立代表として因幡薬師に「私立高等家政女子校」が開学されました。建学の精神である「仏教を基盤とした道徳教育」や熱心な指導が評価されて生徒数が急増したため、校舎の増改築が必要でした。しかし、資金面での見通しが立たず、閉校せざるを得ない状況でした。そんな中、「本校の教育の不十分さが原因で閉校するなら諦めもつくが、学校の真価が認められ、本校を信頼して入学した生徒たちを、金銭的な理由で犠牲にはできない」との思いから、廃校に反対する人たちによる寄付金が集められましたが、校舎の改築には不十分でした。その頃、主幹となった大島先生も資金の調達に当たり、学校関係者の協力とあわせて廃校の危機を回避し、広い土地への移転も成し遂げられました。

一九三〇年、大島先生は本校の第三代校長に就任されました。校訓として「清純貞淑・感謝勤労・敬上慈下・天物尊重」を掲げ、毎週の全校集会で訓話を行い、また生徒による自治を徹底して実施しました。この頃にはさらに生徒数も増え、校舎増改築等の課題が山積していました。この解決のため、岡崎円勝寺町が選ばれましたが、土地購入や校舎建設等にかかる費用総額七十五万円をいかに集めるか、大島先生を除いては、誰もが見通せない状況でした。そんな中、一九三四年九月、鉄筋コンクリート地上四階・地下一階の本館（現在の一号館）が見事に完成し竣工を迎えたのでした。

時を同じくして、大島先生は東京の大本山増上寺の法主に就任され、月の半分を本校、残り半分を増上寺という二重生活を始められました。その激務もあり一九四五年一月二四日、本館の居室で、七十五歳の生涯を閉じられたのでした。

大島先生は一度目のとき、既に次の移転の必要性や資金繰りの困難を予測し、今度は独力でやらねばならないという覚悟を持たれたそうです。「私立学校の校長が、一念独力で集めるには、七十五万円という額は冷嘲を買うのに充分な数字であったが、家政女学校の地鎮祭挙行は確かに行われた」と新聞で報じられました。大島先生は十六年間で人知れず費用を蓄えるという、奇跡的で不思議な取り組みを実現されたのです。その内訳は「お布施の五十銭から多いものでも五百円を超えない」というように、いかに零細の寄付が数多く集まったか思い知らされます。教え子が亡くなったと言えばその母は集まった香典を是非にと持参し、卒業生が結婚したと言えば記念の寄付があり、既に母となった卒業生は「お金がないのでせめて労力を差し上げたい、何なりと用事を言いつけてください」と、背に子どもを負い手には子どもの手を引いて、大島校長を訪れた…。岡崎キャンパス設立にはこうした涙ぐましいお話が数多く織り込まれており、大島先生の人となり、そして偉業を物語っているのといえます。

遷化されるまでの三十四年間、二度にわたり本校の危機を救い、維持存続・隆盛へと発展させた功績、そして、総合学園としての今日の基礎を確立された功績は、まさしく学園中興の祖であり、その大恩に感謝の真を捧げたいと思います。